

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 28 日現在

機関番号：54601
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2013～2014
 課題番号：25770177
 研究課題名(和文) 中世漢字片仮名交じり文の書記システムに関する研究

 研究課題名(英文) The study about the writing systems of Medieval Japanese

 研究代表者
 刀田 絵美子(TODA, Emiko)

 奈良工業高等専門学校・その他部局等・講師

 研究者番号：50632692

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：まず法然著「選択本願念仏集」について、親鸞が漢字片仮名交じりで書き下した「選択本願念仏集延書」と比較した。その結果、延書での特徴的な補読例として断定の助動詞「ナリ」を補う例が散見された。一方で少数例ではあるが、漢文には存在する「也」字と対応する箇所が延書では見られない、という現象も見られた。また観智院本「三宝絵詞」について、公刊されている索引を用いて、和語の自立語と表記の対応関係をサンプル調査した。その結果、一語につき複数漢字表記する語は一割に満たず、特に動詞に多いことを明らかにした。さらに特徴的な同訓異字である語句を取り上げ、どのような要因が表記の差となって表れているのか、検討した。

研究成果の概要(英文)：First of all, I was compared for the "SENJYAKUHONGAN-NENBUTSUSHU(選択本願念仏集)" which was written by Hounen and "SENJYAKUHONGAN-NENBUTSUSHU-NOBEGAKI(選択本願念仏集延書)" which was written by Shinran. As a result, it was found to compensate for the assertion of the auxiliary verb "Nari" as a characteristic example in "NOBEGAKI". On the other hand, a few while in the corresponding place as "也" character that is present in "SENJYAKUHONGAN-NENBUTSUSHU(選択本願念仏集)" is not observed in "NOBEGAKI". Then, the "SAMPOUEKOTOBA(三宝絵詞)", using the index that is published, and samples investigated the relationship of notation independent word of native Japanese words. As a result, the term multiple Chinese characters per word is not less than one percent, I was especially found that many in the verb. And picked up a word or phrase is a more distinctive same word(同訓)another Chinese characters(異字), what factor is what has appeared as a difference of notation, were studied.

研究分野：日本語の歴史

キーワード：漢字片仮名交じり文 中世語 表記

1. 研究開始当初の背景

古代、自国語を書き表すための手段として、東アジア諸国では中国語に由来する漢字・漢文を取り入れた。それをきっかけに、朝鮮半島における吏読・時代は下るがベトナムにおける字喃のように、自国語を書き表すための表記法が表れた。日本においても、「訓読」が発明され、他方で「仮名」が発明された。

日本語書記史の中で、長く中心的な表記体であったのは、日本漢文(日本語を背景に作成され、に日本語文として読まれることを想定された漢文)、漢字平仮名交じり文、漢字片仮名交じり文の三種である。これらは、使用する文字種が異なるだけでなく、異なる場で使用されていたことが先行研究によって明らかにされている。

この三種の表記体のうち、現代日本語文の源流とされるのが、漢字片仮名交じり文である。それまで、文章表記にはほとんど用いられることのなかった片仮名を用いて説話などを表記した資料が平安院政期に台頭した。

筆者は、これまでの研究で、中心的な漢字片仮名交じり文資料である「今昔物語集」を取り上げ、語句と表記の関係性を論じてきた。しかし、今昔物語集自身の依拠資料が明らかでなく、今昔物語集に見られる表記の整理を行うことは出来ても、その表記が何に基づいているのか、明らかに出来ない、という点で、資料性に問題を抱えていた。

2. 研究の目的

本研究では、漢字片仮名交じり文と比較すべき漢文体の資料が明らかで、かつ資料の成立や書写年代の近い資料を取り上げることで、中世における漢字片仮名交じり文資料の特徴を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

まず、法然著「選択本願念仏集」を親鸞が漢字片仮名交じり文に改めた「選択本願念仏集」延書と比較し、訓読した日本語文と漢字片仮名交じり文を比較する。また、「三宝絵詞」を用いて、同一内容を漢文体で表記する場合と片仮名/平仮名で表記する場合の差異を検討する。以上、複数の観点から漢文と漢字片仮名交じり文を比較することで、(片)仮名を交えて表記することの特徴を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1)「選択本願念仏集」と「選択本願念仏集延書」の比較
東洋文庫に赴き、岩崎文庫旧蔵「選択本願念

仏集」の訓点状況を調査した。本資料と現在公刊されている往生院本・法然院蔵本に見られる訓点を「選択本願念仏集」を訓読する際に用いられる訓点と仮定し、専修寺蔵「選択本願念仏集延書」と比較した。

その結果、延書では特徴的な補読例としては断定の助動詞「ナリ」を補う例が散見された。一方で、少数例ではあるが、漢文には存在する「也」字と対応する箇所が延書では見られない、という現象も存在した。選択本願念仏集については、資料自体は大部ではないが、比較するものが多く、作業自体が終了していないため、本研究で得たデータを整理し、今後、公開していく予定である。

(2) 観智院本「三宝絵詞」における和語の自立語と表記についての分析

観智院本「三宝絵詞」については、公刊されている索引を用いて、和語の自立語と表記の対応関係をサンプル調査した。その結果、一語につき複数漢字表記する語は一割に満たず、特に動詞に多いことを明らかにした。また、「いさご(沙・砂)」「おもむく(趣・赴)」を取り上げ、前田本・関戸本との比較を通して、中世前期資料に見られる異字同訓の実態を述べた。

まず、「いさご(沙・砂)」観智院本で「いさご」と訓ずる七例ならびに仮名書き例二例について、表記形態が異なる前田家本、関戸本の該当箇所と比較し、漢文で表記された前田家本では「沙」のみを用い、平仮名文で表記された関戸本では仮名表記のみを用い、一語一表記で安定していることが分かる。一方、観智院本では、上巻で「沙」、下巻で「砂」と仮名表記が見られる。ただし、これらの用例は同一説話内でのものであり、巻による偏差と言い切るには不安が残った。古辞書の記述を確認すると、書写年代や原撰本系か改編本系かの違いはあるものの、類聚名義抄は「沙」を「砂」の俗字とする。康熙字典「砂」欄には、広韻に「俗沙字」とあることになっている(筆者該当版未見)。以上、「沙」「砂」は中国古典文では字体が正俗の関係にある同じ語であったこと、またそれを参考にしたであろう古辞書ではどちらが正でどちらが俗かという点での混乱が見られることが分かる。

また、「おもむく(趣・赴)」については、観智院本で「趣」が用いられるのは名詞として用いられる場合である。一方、「赴」が用いられるのは動詞として用いられる場合であった。それに対して前田家本では「趣」のみが用いられる(関戸本はすべて仮名書きのため、除外)。三宝絵詞における表記の実態や古辞書の記述から、現代語とは異なり、中世前期においては「おもむく(おもぶく)」が異字同訓語であった可能性が指摘できる。

(3) 中世書写資料における同訓異字と表記体の関係についての分析

(2)の研究と受けて、「おもむく(趣・赴)」については本研究が対象とする中世前期に成立した資料に研究範囲を広げ、どのような要因で漢字表記が選択されるかを検討にした(調査資料:32種)。

その結果、複数漢字表記する場合、まず、本朝文粹のように中国古典文の用法を利用して語を識別させようとしている資料が存在する。また、平家物語のように語が記述された表記形態に対応する資料、雲州往来のように巻による偏りが存する資料が存在する。このように、同じ複数漢字表記現象であっても、様々な要因によって、表記選択が行われている。

また、「おもむく」を一漢字表記する資料については、「赴」のみを用いる資料も存在するが、それらは動詞での用例に限られており、名詞も「赴」で表記したかは不明である。用例がないわけではないものの、名詞を「赴」で表記する中世書写資料は圧倒的に少ない。

これを踏まえると、中世書写資料においては「おもむく」を「趣」で表記することが一般的であると言える。一漢字表記する場合は「趣」を、複数漢字表記する場合は「趣」「赴」を用いる、という中世表記の実態は、色葉字類抄の認識と一致している。

そんな時代にあつて、本稿で検討したような要因によって複数漢字表記する資料があり、そこで用いられていた中国古典文の影響を受けた表記選択の方法が、特に現代日本語の表記選択の方法として採用されていると考えられる。

その結果、二字とも用いる場合、中国古典文の用法を利用した語の識別を意図するものや巻による偏りが存在することが分かった。一方で、「赴」のみを用いる資料では動詞の用例しか見られなかった。なお、名詞を「赴」で表記する中世書写資料は圧倒的に少ない。それに対して、「趣」のみを用いる資料では品詞の差が表記に影響しない。

以上の検討を通して、中世書写資料においては「おもむく」を「趣」で表記することが一般的であると言える。一漢字表記する場合は「趣」を、複数漢字表記する場合は「趣」「赴」を用いる、という中世表記の実態の一端を明らかにした。

なお、(3)においては、「おもむく」の同義語「おもぶく」について、マ行音とバ行音が交替しているものの、これは和文語と漢文訓読語の違いであり、用例を検討した場合、どちらの語として表記されたか、活用語尾などでは判断できないものがあるため、合わせて検討した。

(4) まとめ

(1)がある一つの資料を取り上げ、当該

資料を「文」の集合体として分析したため、漢文から日本語文に改める際にどのような足し引き(補読・不読)が行われるか、検討した。この研究が大成すれば、漢文から日本語文オリジナルの表記体へと変遷した日本語の歴史の中で、どのような現象が起こったか、具体的に明らかに出来る期待が持てる。

また(2)では同じく一つの資料を取り上げつつ、資料を「語」の集合体として取り上げたために、同訓異字の問題について検討することが出来た。

(2)を発展させた(3)では、資料を同時代の資料群に入れ込むことで、研究対象としてきた漢字片仮名交じり文の位相はもとより、表記に影響を与えるものについて検討することが出来た。

以上、(1)から(3)の研究を通して、中世前期資料に見られる様々な現象について網羅的に検討することが出来たということ、本研究の成果のまとめとしたい。

5. 主な発表論文等(研究代表者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

(1) 刀田絵美子「平安鎌倉時代の「異字同訓」 三宝絵詞を中心として」『日本語学』通巻428号(明治書院 2014年8月)

[学会発表](計 1件)

(1)「中世書写資料に見られる「おもむく(おもぶく)」の表記について」(広島大学国語国文学会平成26年度研究集会2014年7月12日(於:広島大学))

[図書](計 1件)

(1) 総本山醍醐寺編『醍醐寺叢書目録篇 醍醐寺宋版一切経目録 全五冊別冊一』(汲古書院 2015年3月)

本書は目録出版のための第一次調査・第二次調査、原稿内容確認のための事後調査(2ヶ年)を経て、出版された。そのため、具体的な編著者名を載せず、目録の基になった調査者一覧を第五冊656ページに掲載している。以下の通りである。

小林芳規・沼本克明・月本雅幸・鈴木恵・原卓志・佐藤利行・山本秀人・佐々木勇・山本真吾・青木毅・森岡信行・刀田絵美子、来田隆(一次)・西村浩子(一次)・小倉健太(一次)・本田義央(二次)・平川恵実子(二次)・山崎一穂(二次)・坂水貴司(二次)

本研究のテーマとは、

- (1) 本研究が対象とする中世前期に先行する時代の資料であること
- (2) 本研究が対象とする中世仏教資料に大きく影響を与えたであろう宋版一切経であること

以上の点において、関連する内容であると考え、2013年度・2014年度に本書の出版に係る調査などに科学研究費を利用したため、ここに掲載する。

〔資料〕(計 2件)

(1) 鈴木恵・原卓志・平川恵実子・刀田絵美子「醍醐寺蔵宋版一切経寄捨人別捨銭刊記一覧」(総本山醍醐寺編『醍醐寺叢書目録篇 醍醐寺宋版一切経目録 全五冊別冊一』)

(2) 鈴木恵・原卓志・平川恵実子・刀田絵美子「醍醐寺蔵宋版一切経刻工名索引」(総本山醍醐寺編『醍醐寺叢書目録篇 醍醐寺宋版一切経目録 全五冊別冊一』)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等：特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

刀田絵美子 (TODA EMIKO)
奈良工業高等専門学校, 一般教科, 講師
研究者番号: 50632692